

地域子育て支援拠点事業の現状と課題

ー広島都市学園大学内施設における利用保護者への第9回Web調査からー

富田 道子・権田 あずさ・加藤 弘美・國清 あやか
須崎 朝子・深澤 悦子・吉原 直樹

広島都市学園大学 子ども教育学部 こどもケアセンター運営委員会

要 旨

コロナウイルスとの共生が求められるなかで、利用保護者の生活意識に着目したWeb調査を実施した。明らかになった特徴を以下の3点にまとめる。

第一に、利用保護者が本学こどもケアセンターを利用する目的は、知識や情報を得ることが主ではなく、親子ともに居心地の良さ、快適さ、楽しさを感じられるからであることが改めて確認できた。

第二に、コロナ禍の「2020年～2022年」に出産し「頼る親族がいない」場合に、不安感情項目に「よくある」とチェックを入れる傾向が高まることが確認できた。

第三に、リフレッシュのために本学こどもケアセンターを訪れ、他者と何気ない会話をすることで、結果的に利用保護者のストレスや不安の解消に繋がることが示唆された。

キーワード：地域子育て支援拠点事業、利用保護者、出産年、頼れる親族、気がかり

1 はじめに

2023年5月、新型コロナウイルス感染症法上の位置づけが「2類相当」から「5類」に引き下げられ、感染対策の実施は個人や学校等の判断に委ねられた。本学こどもケアセンター「いーぐる」も広島市からの通知「予約制は原則廃止」に従い、それまで実施してきた午前・午後の予約制度を徐々に緩め、いまではコロナ禍以前の賑わいが戻ってきている。

こどもケアセンター運営委員会主催の企画として、遊びの講習会では、例えば、大学オープンキャンパスの企画等に絡ませることで学生の協力も得られることから、からだ全体を使ったダイナミックな遊びを経験する機会をつくることができた。また、ボランティア学生による絵本の読み聞かせでは、子どもを大切にする文化を地域に育てる一助になった。さらに、後述するアンケート結果を先取りすれば、リトミックが復活し、保護者の期待が高まっている。

厚生労働省は「地域における保育所・保育士等の在り方に関する検討会 取りまとめ」（2021年12月）において、「今後は、全国の地域において未就園児への地域子育て支援を充実していくことが必要である」という意識のもと、「地域全体であらゆる子育て資源を活用するとともに、支援が単発で終わらずに、子育て支援機関が相互に連携するとともに時間軸的にも包括的に家庭をフォローするなど、『面』としての支援を継続的に行うこと」

を求めている。

このようなニーズに適う取り組みを、本学こどもケアセンター（以下、本センターとする）においても進めていくことがより可能になったといえよう。

そこで、利用者の多様なニーズに合わせた事業をすすめる手掛かりとして、今年度も利用保護者の生活意識に着目したアンケート調査を実施し、本センターの成果と課題を検討する。

2 研究方法

2.1 調査対象者・時期・調査方法・倫理的配慮

調査対象者は、本センターを利用している保護者108名であり、回収率は100%であった。調査時期は2023年10月23日から11月22日である。

調査方法は、本センターを利用する保護者に調査の目的や倫理的配慮を記した調査依頼状を手渡し、「調査に同意する」者はQRコードからグーグルフォームに入り、調査項目に回答するというものである。なお、本センター来室時にスマートフォンを所持していない「調査に同意する」者については、質問紙と筆記具を手渡しその場で回答記入を依頼した。その後回収した用紙は、子育てアドバイザーが他の利用者に回答内容がわからないよう袋に入れて保管し、本調査担当教員が後日受理してグーグルフォームに転記する方法を準備した。実際に質問紙調査を実施した件数は1件であるが、必須項目すべてに回答していなかったため無効とした。

なお、本調査は広島都市学園大学倫理審査委員会の承認を得ている。

2.2 質問項目の新設および項目内容の整理

前回の調査で、本センター利用保護者のメンタルヘルスに着目できる項目を新たに設定する一方、短時間で回答できるよう質問項目数を精査・削減した。今年度もそれらの項目を活かすこととした。

新たに加えた質問項目は、「本センターを利用しているお子様を出産された年について、該当するものにすべてチェックを入れてください」である。本学施設を利用する子どもの出産年により保護者の保育・生活意識等に違いがあるという仮説を立て、コロナウイルスによる感染状況を念頭に「2023年」「2022年～2020年」「～2019年」の3件法で回答することとした。また、昨年度の項目「コロナ禍における利用保護者自身の変化」を「利用保護者自身が感じていること」に変え、質問項目の語尾を一部修正した。

2.3 分析方法

本調査における回答は、基礎統計量と回答の割合で集計し全体的な傾向を把握するとともに、項目間の関連もみた。

3 結果と考察

3.1 属性・家庭環境

本センター利用者に関する属性と家庭環境は次の通りである。

まず，利用保護者の年代は30代が75.0%，20代が13.9%，40代が10.2%であることがわかった。

利用保護者の子どもの数は，一人と回答した割合が58.3%，二人が34.3%であった。

さらに，利用している子どもの年齢は，0歳が37.0%，1歳が51.9%，2歳が17.6%，3歳（未就園児）が10.2%であることがわかった。

これまでの利用回数について，「初めて利用した」が25.0%，「2～4回」が28.7%，「5回以上」が46.3%であることがわかり，本センターを利用している子どもを出産した年については，「2023年」と回答した保護者は36.1%，「2020年～2022年」の回答者は71.3%，「～2019年」の回答者は2.8%であることが確かめられた。

家庭環境は，利用者のほとんどが核家族であり，何かあった時にすぐに頼れる（近居している）親族の有無を尋ねたところ，「自分の父」と回答した割合は41.7%，「自分の母」が63.0%，「配偶者・パートナーの父」が25.0%，「配偶者・パートナーの母」が40.7%，「自分のきょうだい」が25.0%，「自分の親・きょうだい以外の親族」が4.6%，「頼れる者はいない」が23.1%であった。

3.2 本センターを知ったきっかけ

本センター「いーぐる」を知ったきっかけを尋ねた結果，最も高い割合を示したのは，過去の調査結果と同様に「友人・知人からの紹介」で45.4%だった。次いで「区役所や公民館」の25.0%，「インターネット」の13.9%となり，ほぼ前回の調査と同じ結果が得られた。

3.3 本センターの利用理由

本センターの利用理由は，「最も当てはまる」，「当てはまる」，「当てはまらない」の3件法で回答するものとした。各項目の回答平均値からその特徴を明らかにする（表1）。

表1 オープンスペース利用理由

	当てはまらない (%)	当てはまる (%)	最も当てはまる (%)
自分の友人を作ったり，友人と交流できる	29.6	53.7	16.7
悩みを気軽に話せる場がほしかった	13.9	49.1	37.0
子どもが喜ぶから	2.8	9.3	87.9
同じような年齢の子どもとの交流	7.4	40.4	52.2
親子のストレス解消やリフレッシュ	6.5	17.6	75.9
あたたかく迎えられ，ほっと心がなごむ	1.9	30.6	67.5
絵本，おもちゃ，砂遊びが楽しめるから	2.8	9.3	87.9
子育てアドバイスや情報が得られる	3.7	44.4	51.9
育児休暇後の復帰，子どもの保育所入所の準備	54.6	27.6	17.8
身体計測ができる	31.5	49.1	19.4
子育て相談がある	7.4	46.3	46.3
講座や講習会の企画がある	14.8	58.3	26.9

まず、「最も当てはまる」の回答割合に着目すると、「子どもが喜ぶから」の87.9%、「絵本、おもちゃ、砂遊びが楽しめるから」の87.9%がもっとも高く、次いで「親子のストレス解消やリフレッシュ」の75.9%であった。

3.4 子どもについての気がかり・心配ごと

子どもについての気がかり・心配ごとを尋ねた結果、気がかり・心配ごとに「食事」を挙げた者は54.6%と最も高く、次いで「発達面」の35.2%、「性格・行動」が23.1%であった。

さらに、気がかり・心配ごととして「食事」を挙げた利用者にその詳細を尋ねたところ、「好き嫌いがある(37.3%)」「かまない(30.7%)」「そもそも料理を作るのが苦手(26.7%)」「食べる量が少ない(25.3%)」という回答が得られた。

3.5 本センターへの満足度

本センターについて満足しているかどうかを尋ねたところ、「満足」が89.8%、「ふつう」が10.2%となり、ほとんどの利用者が満足と回答したことがわかった。

3.6 利用保護者自身を感じていること

家庭生活において利用保護者自身を感じていることを尋ねた結果は、表2の通りである。

「よくある」「時々ある」の回答割合に注目すると、「子どもと一緒に時間が増えて、楽しくなった」の回答が96.2%と最も高かった。

一方、「子どもに『ダメ』と制する言葉が多い」が60.2%、次いで「『ひとりにになりたい』と思うことがある」が49.9%、「子どもにイライラすることがある」が46.3%という結果も得られた。

表2 利用保護者自身を感じていること

	よくある (%)	時々ある (%)	たまにある (%)	ない (%)
子どもと一緒に過ごす時間が楽しい	73.1	23.1	3.7	0.1
子どもに「ダメ」と制止する言葉が多い	16.7	43.5	30.6	9.2
子どもにイライラすることがある	7.4	38.9	35.2	18.5
子どもを叩いたり、叩きそうになったことがある	0.9	18.5	15.7	64.9
些細なことで感情を抑えられないことがある	6.5	19.4	36.1	38.0
まわりの人の言動に敏感になることがある	10.2	28.7	31.5	29.6
孤立感や閉塞感を抱くことがある	9.3	18.5	29.6	42.6
「ひとりにになりたい」と思うことがある	19.4	31.5	34.3	14.8

3.7 「本センター利用子どもを出産した年」と「利用保護者自身を感じていること」の関係

本学施設を利用する子どもを出産した年によって，利用保護者の保育・生活意識等に違いがある，という筆者らの仮説を検証するために，「本センター利用子どもを出産した年」と「利用保護者自身を感じていること」の関係を精査したところ，「2023年」「～2019年」と回答した保護者は，イライラする，叩きそうになる，ひとりになりたいと思うなどの不安感情にチェックを入れていないことがわかった。つまり，これら不安感情にチェックを入れたのは「2020年～2022年」に出産した保護者77名ということが確認できた。

3.8 「2020年～2022年」に出産した利用保護者の「何かあった時にすぐに頼れる（近居している）親族の有無」と「利用保護者自身を感じていること」との関係

前項目の結果を受けて，「2020年～2022年」に出産した利用保護者と「何かあった時にすぐに頼れる（近居している）親族の有無」の関係を調べたところ，頼れる親族がいると回答した割合は72.7%（56名），頼れる親族がいないと回答した割合は27.3%（21名）であることがわかった。

さらに，頼れる親族がいる56名のうち，不安感情に「よくある」と回答した者は19名（33.9%），頼れる親族がいない21名のうち，不安感情に「よくある」と回答した者は13名（61.9%）であることがわかった。

加えて，2項目以上に「よくある」と回答した者は，頼れる親族がいる場合は7名（36.8%），頼れる親族がいない場合は7名（53.8%）であることも明らかになり，コロナ禍に出産し，頼れる親族がいない利用保護者の不安感が高く，内容也多岐にわたることが確認できた。

3.9 コロナ禍に出産し，頼れる親族がいない利用保護者は，なにを目的に本センターを利用しているのか？

頼れる親族がいない利用保護者（21名）と本センターを利用する理由との関係に注目してみると，「最も当てはまる」と回答した割合が最も高かったのは，「子どもが喜ぶから」の90.5%，次いで「親子のストレス解消やリフレッシュ」と「絵本，おもちゃ，砂遊びが楽しいから」の85.7%であった。

さらに，「3.3 本センターの利用理由」で示した全体の結果と，頼れる親族がいない利用保護者（21名）に絞った結果を比較してみると，先の「親子のストレス解消やリフレッシュ」は全体結果75.9%に対して頼れる親族がいない場合は85.7%，「悩みを気軽に話せる場がほしかった」は全体結果37.0%に対して57.1%，「同じような年齢の子どもとの交流」は全体結果52.5%に対して61.9%と，いずれの項目も頼れる親族がいない場合に高い回答割合を示している。

一方，「子育てのアドバイスや情報が得られる」と「子育て相談がある」は，全体結果

よりも低い回答割合であるため、コロナ禍に出産し、頼れる親族がいない利用保護者は、子育てに関する相談をするためというよりは、他者との何気ない会話や交流をはかる目的でセンターを利用していることが示唆される。

3.10 特に参加したい企画

「いーぐる」の企画として特に参加したいものを尋ねたところ、第1位はリトミック(78.7%)、第2位は絵本の読み聞かせ(55.6%)、第3位はコンサート(51.9%)であることがわかった。

3.11 自由記述から

質問紙最後の自由記述には、多くの感想が寄せられた。具体的には「スタッフの皆さんがいつも明るくて、疲れていてもここに来ると元気になります」「ここのオープンスペースが一番良くて気に入ってます」「素敵な居場所をありがとうございます」「約3年通っています。いつも先生方が温かく迎えてくださりほんと出来ます」「夫の転勤で広島にきました。土地勘もないので、とてもありがたい場所です」などがあった。

3.12 考察

属性や家庭環境について、まず利用保護者の年代では、多くが30代であることがわかった。しかし、それに次ぐ利用者の年代をみると、40代よりも20代の利用者が増え、さらに1名ではあるが10代の利用者がいることもわかり、若年層の利用が増えていることが確かめられた。本センターを知ったきっかけの多くが「友人・知人からの紹介」であることから、20代利用者からのSNS等での発信が影響していることを推察する。

利用保護者の子どもの数は、一人と回答した割合が58.3%(前回調査70%)、二人が34.3%(同19.0%)であり、複数の子どもがいる家庭が増えていることが確認できた。

利用回数については、「初めて利用した」が25.0%、「2～4回」が28.7%、「5回以上」が46.3%であることが明らかとなり、利用保護者の7割強が本センターをよく利用していることがわかった。利用に際して、予約制や人数制限がなくなったことが反映していると思われる。

本センター利用の主な理由について、「最も当てはまる」の回答割合は「子どもが喜ぶから」「親子のストレス解消やリフレッシュ」「絵本、おもちゃ、砂遊びが楽しめるから」が高い傾向にある。森、布井ら(2022)は、地域子育て支援センターを利用するのは第一子のみの母親が多く、初産の子育ては知識や情報が不足していることから利用する動機が強く働いているのではないかとまとめた。しかし、上述したアンケート調査結果から、本センターの保護者の場合は知識や情報を得ることが主な利用理由ではなく、親子ともに居心地の良さ、快適さ、楽しさを求めて繰り返し利用しており、そのために第二子も続けて利用する傾向があることが確認された。さらに、子どもの個性・特性は一人ひとり異なる

ことから、保護者が求める知識・情報が第一子に限られるものではないことを「なんでも相談」「食のなんでも相談」などをとおして感取している。

子どもについての気がかり・心配ごとについては、「食事」に関する回答割合がもっとも高く、次いで「発達面」「性格・行動」の順になっている。とりわけ、「食事」に関する気がかり・心配ごとがこれまでの調査のなかでもっとも高い割合を示していることから、「食のなんでも相談」だけでなく、利用者同士の交流が結果的に助け合える関係を築けるようなコミュニティづくりの仕掛けを模索したい。

利用保護者自身が感じていることについて、回答割合がもっとも高いのは「子どもと一緒に時間が増えて、楽しくなった」であった。また、イライラする、ひとりになりたいと思うなどの不安感情を抱く回答割合が40%を超える項目に着目すると、前回調査の5項目から3項目に減少したことも確かめられ、保護者のさまざまな不安感情が軽減していることがわかった。

しかし、その詳細をながめると、回答割合は高くないものの、不安感情項目の「よくある」にチェックをいれた保護者全員が子どもをコロナ禍の「2020年～2022年」に出産しており、「頼る親族がいない」場合にその傾向が高まることが確認できた。

ストレスに対処することをストレスコーピングといい、「外的・内的要求やそれらの間の葛藤を克服し、耐え、軽減されるために行われる認知的・行動的努力」(Folkman & Lazarus, 1980) と定義されている。このストレスコーピングは、主に問題焦点型コーピング、情動焦点型コーピング、回避型コーピングの3つに分類される。森田(2008)が「回避型コーピングは息抜きを意図して主体的に用いられた際にストレスを低減する効果がある」と報告しているように、専門家等に相談をするといった問題焦点型・情動焦点型コーピングのような積極的対処行動でなくても、リフレッシュのために本センターを訪れ、他者と何気ない会話をすることで、結果的に利用保護者のストレスや不安の解消に繋がることが期待される。

この点については、本調査における自由記述からも推察され、例えば「スタッフの皆さんがいつも明るくて、疲れていてもここに来ると元気になります」「スタッフの皆さんがいつも親身になって話を聞いてくださるのがありがたいです」「いつも親切で優しくて頼りになります」「なんでも相談でき、助かっています」「親子共々、安心できる場所になっています」「話を色々聞いてもらったりしてありがたい場所です」等のメッセージから、常に相談にのることができる保育アドバイザーの存在、保育アドバイザーを介した親同士のつながりにより、利用者一人ひとりの安心な暮らしの土台ができていているように思われる。

以上のことから、予約制が廃止され、いつでも気軽に訪れることができるようになった本センターの担う役割は大きいことが明らかになった。

4 まとめと今後の課題

コロナウイルスとの共生が求められるなかで、利用保護者の生活意識に着目したWeb調査を実施した。明らかになった特徴を以下の3点にまとめる。

第一に、利用保護者が本学こどもケアセンターを利用する目的は、知識や情報を得ることが主ではなく、親子ともに居心地の良さ、快適さ、楽しさを感じられるからであることが改めて確認できた。

第二に、コロナ禍の「2020年～2022年」に出産し「頼る親族がいない」場合に、不安感情項目に「よくある」とチェックを入れる傾向が高まることが確認できた。

第三に、リフレッシュのために本学こどもケアセンターを訪れ、他者と何気ない会話をすることで、結果的に利用保護者のストレスや不安の解消に繋がることが示唆された。

2023年4月1日に発足したこども家庭庁。そこでは「必要とするすべての家庭が利用できる支援を目指します」という呼びかけのもとで、さまざまな施策が示されている。しかし、地域子育て支援事業の項に目を向けると、「公共施設や保育所など、様々な場所で、行政やNPO法人などが担い手となって行います」に留まり、実際の活動計画等は行政指導によって各事業者に委ねられているのが現状である。

学内で毎月実施している保育アドバイザーとの会議では、本アドバイザーが利用保護者とゆるやかな信頼関係を築いていることが「小児科や保健師につなげる声掛けをしたい」「大学附属保育園に一時保育の制度があることを教えてあげています」「利用者さんのかには、広島市の子育て支援の各種制度を知らない人がけっこういます」などの声からうかがえる。

以上のことから、今後も本学こどもケアセンターを運営する組織の一層の連携を図るとともに、地域の他職種との協働を検討しながら、利用保護者と子どものwell-beingの増進を目指していきたい。

謝辞

Webアンケート調査にご協力くださいました利用者の皆様と、本事業に携わる保育アドバイザー、そして、本学の教職員に厚くお礼申し上げます。

引用・参考文献

- 森雄二郎，布井雅人ら（2022）．地域子育て支援センターが果たすべき役割や機能について：利用者の期待・満足度についての量的調査を通じて．聖泉論叢，1，15-29.
- 森田美登里（2008）．回避型コーピングの用いられ方がストレス低減に及ぼす影響．健康心理学研究，21，21-30.
- Folkman, S. & Lazarus, R. S. (1980). An analysis of coping in a middle-aged community sample. Journal of Health and Social Behavior, 21, 219-239.